

すべての希望は光から

無電燈部落の一掃着々進工

希望は光からと東北配電事務所では先般の争議以来サービスマン強化の一方法として無電燈部落の一掃に乗り出し、明るい電燈の下に増産に拍車をかけて下さいと專線による新設置方法により、不足部分の電燈線を極度に利用して着工を開始したが、既に九ヶ村十二部落の工を終った、尙未了の分は田植の終了を待つて進行し年内には事務所管内の石城郡下は勿論、双葉郡下の分も完了せしめることとして、今日まで電燈の光を知らなかつた部落もこれにより明るくなり夜間の副業も可能となつたので、何れも大喜びである。

早くも十二部落へ

増産上にも及ぼす効果莫大
恵まれた四六四戸七八七燈

全部完工

既に点燈をみた部落は九ヶ村十二部落で、恵まれた戸数は四百六十四戸で、この点燈数は左記の通り七百八十七燈に達したが、初めて電燈の下に仕事を始めた部落の人達は、夜業が出来る様百九十四戸、田植の終了を待ち、脱穀その他も電氣が利で、その他の二部落も年内には用し得る上に、今年素晴らしい完成工とされる。

- 現在着工七部落
●好間村田代部落四〇戸(八七燈) ●内郷町田代部落二七戸(二七燈) ●植田町下高倉部落一八戸(二七燈) ●警崎村湯島部落二四戸(三三燈) ●双葉郡龍田村上築田部落三〇戸(三七燈) ●同村下築田部落二九戸(三七燈) ●同村下築田部落二九戸(三七燈) ●同村下築田部落二九戸(三七燈) ●同村下築田部落二九戸(三七燈)
- 本年内には
●水戸村銅屋場二二戸(三七燈) ●同村水戸部落一六八戸(二二四燈) ●同村水戸部落一六八戸(二二四燈) ●同村水戸部落一六八戸(二二四燈) ●同村水戸部落一六八戸(二二四燈) ●同村水戸部落一六八戸(二二四燈) ●同村水戸部落一六八戸(二二四燈) ●同村水戸部落一六八戸(二二四燈) ●同村水戸部落一六八戸(二二四燈) ●同村水戸部落一六八戸(二二四燈)

製鹽法の改正指示

東北配電四倉電業所では製鹽事業法の改正に伴い、これが徹底を期するため管内の自給製鹽業者二十余名を召集、郡山専賣局から渡邊治基氏等の臨席を得て、二十八日午前九時から改正法の説明、申請様式の記載法等の指示を受けた。

友の會の奉仕

平市友の會では海外引揚者中の婦人連に對し、一日から城山青年會館で無料裁縫講習會を開催した。

四倉町へまた

二製塩工場
日東紡績株式會社では全園十數箇所の工場員に配給するため、四倉工場(漁業會所有地)を製糖工場として七月中旬迄に竣工せしめることになつた、日産七噸半の目標で余分は専賣局へ納入する。又縣農業會四倉分會工場でも縣下各地農業會職員へ配給のため工場内に製糖所を新設する、日産二百五十キロで來月早々開始するといふ。

小口信用貸金

湯本町東町二三七 青柳
配給のため工場内に製糖所を新設する、日産二百五十キロで來月早々開始するといふ。

開放

投書歓迎す
要望批判結構
紙上匿名可

映畫ファンへ
終戦後市内の活動常設館の汚れたこと、あの椅子の破損のしやうには驚く、腰掛けの布の破れたもの、後の寄りかゝりの板の折りとられたもの等々が随分多い、不安定な椅子に寄つていつ切りとつたのか映畫幕さへ見る映畫の危しさを、折角の映畫切つて持ち去られてゐることが、この破損は常設館經營者の何して對策を講じたら良いのか汚すことは、其の汚す本人の恥へたいと念する(一映畫狂)

内郷に製粉工場誕生

期待さる、郡下の粉食運動

四倉電業所の榮譽
東北配電四倉電業所では、はさきに行はれた福島地區電熱利用の甘藷温床苗代競技會で、縣下最優秀の成績をおさめたので、本社より金一封を添へて表彰状を贈られた。

警農上棟式

三十日植田校で
縣立警城農學校では先般來植田町東京山に假校舎の建設を急いでゐたが、漸く上棟の運びとなつたので、三十日午前十時から全町國民學校で上棟式を挙行、終つて簡素な直會をも催した。

平市の揚水

頗る好成績
平市では水不足のため北目及び九品寺方面の田植不能のため常警炭礦から揚水ポンプを借用好間川から揚水することとしたが、漸くポンプの据付けも終つたので、二十五日來揚水中で農民を喜ばしてゐる、揚水ポンプは二十四馬力、一日に百四十四立方尺の能率をあげてゐるとある。

四倉農業會で製粉工場を

粉食に對處新設
四倉町農業會では昨今の食糧事情に對處し粉食の實行に協力するため、今度製粉事業にも乗出すことに決定、同町警部補派出所東隣の空地を利用し二十八坪の製粉工場を建設し始めた、六月中旬に完工、七月一日から操業開始の豫定とある。

傳説物語から

王妃ギニヴァーとランスロットの戀

千輝 かつみ
古代神話の世界から中世の傳説の騎士と呼ばれてゐるのはランスロットの世界に入ると、其處にはランスロットであつた、彼は水の最早原始的な本能の戀では女神ヴァイキーンの保護を受け、染め出され、この數ある。カモットの城中で、あの中世の傳説中にも、近世の圓卓の周圍に一つの座を得て、詩人に多くの好題目を興へた。その試合に彼は缺かさず、その中心としたあの一團の設勝の寶玉を受けた。その中に彼は話圖に若くも、王妃ギニヴァーの雄々しい美しい姿はいつとなく、その傳説中でも最も人の興く王妃ギニヴァーの心に消し難味をひく部分、稀世の勇士の影を宿した。ギニヴァーはランスロットと王妃ギニヴァーの愛の物語であつた。王妃ギニヴァーは、この一つの戀物語が加はる、その美と貞淑とを以て満延の渴り始めてあつた。然し一度ランスロットに道ならぬの談話圖に、一点の眼晴が、思ひを染めてからギニヴァーに出され、如何に多くの詩人が、最早世の汚れを知らぬ昔の王妃の傳説を歌つたことだらう。王妃はなかつた、ランスロットは、マロリーがあつた傳説の若くは王妃の火のやうな情な長詩を初めとし如何に多、斯うした煩悶の中に幾年かの同僚と崇敬を、ランスロットの日が経つた、戀で二人の身邊に華々しい然も悲しい生に立ちこめた疑の雲が寛仁な王妃に寄せた。外の敵に對して一度も崩れた騎士の中でも一際優れて騎士の心も騒ぎやうになつた。